
誰か決めてください

鈴露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰か決めてください

【Nコード】

N4357T

【作者名】

鈴露

【あらすじ】

ごくふつーの独身社会人の棗はひよんな行動でドン底へと落とされる！

バケモノに襲われさせて、棗の人生はいかに！！！！

未定ですもの。(前書き)

この物語は、キスマまでです。あとまあ適当に書いたんで気にしないでください。

未定ですもの。

「な〜つめちゃんっ？な〜つめちゃんあ〜ん」

「うっさい！何回も言わなくても聞こえてる！！」

私は今、頭に猫にも狐にも似つかない耳を生やしてたり尻尾付いてたりするバケモノに襲われている（抱きつかれている）
何故こうなったかと言つと。

さかのぼる事4時間前。

私は珍しく町の小さな本屋に来ていた。理由は簡単だ、毎日デスクの前でPCカタカタやっつてるだけじゃつまらない・・・
つて事で本を買いにきた訳である。

しかし・・・何も目的がないのだけでも雑誌だと休憩室にもあるし。
よし、ミステリー小説にしよう。

最近はお魚くわえたドラ猫殺人事件」だとか「ハゲ刑事」だとか、
いろいろシリーズがあると聞く。

どれも一度は見えておきたい物であるが・・・予算の問題で一冊しか買えない。。

24歳独身・・・恋人無・・・給料前の予算、一万

あの時、B組の田中に告白していれば・・・今頃は幸せのウエディング。。

一人っきりのクリスマス何てクソくらえ！！サンタ服のバイトに犬のクソを投げつける恒例行事

誕生日もそろそろ誰かに祝ってもらいたいわ。そう、可愛い美少年に。年は7歳くらいかしら・・・？ああ、シヨタ最高・・・シヨタと付き合いた「おねえちゃん、おねえちゃん！」

んっ・・・どこかで声が・・・？シヨタはどこかしらあ・・・？

「おねえちゃん、あのね、油揚げちょうだいっ」

足元から・・・

「ひっ・・・?!」

そう。足元には私のほかにもう一人の男性・・・?の運動靴があるだけ・・・見上げるとそこには・・・

「おねえちゃん?」

シヨタ声を発している美青年・・・頭に耳が生えてることを退けると

「ひっ・ばっ、バケモノおおおおお!?ちよっ、シヨタ声のバケモンっ!触るな!近寄るな!話しかけるな!!私に近づくなあ!!」

私が全力で暴言&大声を発すと男は目を点にしその後耳を垂らした

あら・・・可愛い・・・

一言でもそう思えば負けだと思いがこれはアウトだ。けど可愛いけど謝らなければ。

「ごっ、ごめんなさい・・・

そんなつもりじゃなかったの、ちよつと驚いただけだから、悲しまないで?」

私が優しく理性を抑えて声をかけると嬉しそうに耳をピンツと立たせ顔を近づけてきたバケモノ

とっさに悟った一言。『喰われる』

「いつ、いや!食べないで!私は食べ物じゃないの!!」

必死で顔を手で隠すと無残にも手を退けられ自分の唇を私の唇にくつつけてきたではないか。

これは俗に言うキスと言うものだろうか・・・何かが弾けた音がした気がしたそう長くもなく感覚的には凄く長い数秒。

そして私は正気にもどった。自分が今、見ず知らずのバケモノにキスされているのだと。

「なっ、何するのよ変態!!」

私は顔を真っ赤にしながらバケモノを突き飛ばし本屋には違和感だ

らけの怪しい木の扉にはいった。

すると、中は階段なっておりそこを下りていくと・・・

今度はイケメン・・・どうなってるのよ！ここの本屋は！とりあえずかくまってもらうわよっと。

イケメンの寝ているベッドの下に隠れ待機。

数分もたたないうちにバケモノがきやがった・・・

ただ息を潜めていれば・・・

「てんちよーてんちよー。おきてえ？」

バケモノははいつて来るなりベッドの上で寝ているイケメンに話しかけているようだ。

イケメンは眠たそうに起きながら衝撃の一言。

「んう・・・？何・・・？扇あいつめ」

「てんちよー、可愛い女の子見つけたから声かけたら凄く酷いこと言われてキスしたら逃げられたんだけど・・・どうしてだろうね？」

扇と呼ばれたバケモノは店長と呼ばれているイケメンに抱きつき甘えている。

もし、バケモノが犬類ならば、ほのぼのする光景になっていただろう。

「そりやお前。。いきなりキスされたら誰だつて吃驚びくっするだろう？まあいいけど・・・さて・・・僕はそろそろ仕事に戻るからね」

イケメンはそういうと立ち上がりバケモノを撫でて外に出て行ったらしい、服装をチラッと見るとこの店の本当に店長のようだ・・・

・・・困ったことになった、私は今このバケモノと二人つきり・・・

もしバレたとなると逃げ道はない、さあどうすれば・・・
考えていると不意にバケモノがベッドに座り口を開いた。

「んー。。可愛かったなあ・・・今までであった子とも何か雰囲気ちがうし、子供ようつな・・・生意気な男のような・・・」

すき放題いわれてる気がする！今すぐにでも殴り飛ばしたい気分だがそうはいかない・・・今出て行くと喰われる場合がある。

ここは落ち着いてこのバケモノが寝るのを・・・「みーつけた」

ホワツツ？！何故覗いたこのバケモノ！！つと叫ぶ間もなく引きつられベッドの上に連行。

「なっ、何で分かったの！つてか離しなさい！！」

抵抗中

「なんでつて良い臭いしてたし？それに、気配で分かるし」

「五月蠅い（うるさい）！！私に何か用？！」

抵抗続行気はゆるめない！絶対に！

「んつとねえ、何か誘われた」

はい・・・？笑顔でこの変態バケモノは何をいつてるの・・・？私・・・

バケモノを誘う能力があるのかしら・・・？そんなファンタジーのよ

うな出来事が・・・

「えつと・・・それは私が好きと言うこと・・・？」

「んー、わからないっ！」

このバケモノがああ！！好きか嫌いかわかりきりしてもらわないと困

るのよ・・・場合によつたら私がここで暮らせだとかあ・・・

会社になんていえば・・・ああ。店長プリーズ・・・

「はあ・・・それで・・・私に要求することは・・・？」

要求がなければ執着される意味がない、独身女。棗の小さなプライ

ドであった。

「んー、要求？そつだなあ。名前教えて？」

満面の笑みで答えるバケモノ

私のプライドが許さないつと言いたいけど、この笑顔の前ではプ

ライドも無効化だった。。

「棗よ・・・植物の方の棗！！」

「よし、まったく分からないけどよろしく」

はい・・・？分からない・・・？何故？あつ、そうかこの子バカなんだ・・・

ああ。。わかつたよし、半径百メートルには近づかないでおこう。

こんなバケモノ+バカ+異物の三トリオなんて受け付けない！！！！

私のプライドが許さないああさっきの

『プライドも無効化だった。』

は何かの間違いよ！よし逃げよう今すぐ逃げて警察に連絡しようっ。

。。あれ・・体が重たい・・・？

「な〜つめちゃんっ？な〜つめちゃん〜ん」

ハッ・・抱きしめられたっ。。病原菌があああ！！！！！！

「うっさい！何回も言わなくても聞こえてる！！」

「本当？ならいいけどー」

「っと、とりあえず私は仕事に戻らないとダメだから離してねっ」

かるう〜く蹴りを食らわし逃亡。

そして、この日から私のバケモノライフが始まったのであった・・・

続いてほしくない。

未定ですもの。(後書き)

とくになし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4357t/>

誰か決めてください

2011年10月9日03時33分発行